

生浜地域誌



21.6.30

第57号

発行 NPO法人ちば・
生浜歴史調査会
電話 080-5387-2592

『生実藩領椎名上郷の御用留』上梓しました。

千葉市中央区南西部から緑区西部の地域を江戸時代に支配した生実藩の生実役所からの通達回覧文書を、各村名主が記帳した「御用留（ごようどめ）」天保10年（1839）1年間の記録を本にしました。

《本書で取り上げた面白い史料》

その1 藩主の領内巡見

九代目藩主が初めてお国入りした9月、領内の巡見をしました。椎名上郷（緑区茂呂町など当時6村130軒）では、名主が、殿様の昼食用に初茸を採って差上げたところ、家臣が塩焼きにして御膳にのせたと記録しています（解説p150・史料p338（私たちは現在、醤油と砂糖でさつと煮て食べたりしますが、塩焼きは初めて知りました。また、塩漬けのうえ油で保存もしたようです）。その後、藩から初入国の祝いとして1軒あたり2合2勺の酒を領分1041軒へ配給しました。<p151（酒の銘柄は不明です。配給作業が大変だったと思いますが、イベントの一つかもしれませんね。）

その2 鷹の餌にする小鳥を運ぶ

將軍の鷹狩り用の鷹を飼育している江戸の御鷹部屋へ、鷹の餌になる雲雀など小鳥を生きのまま運送したのですが、146羽入りの籠2ケと145羽入り籠1ケの437羽を夕方18時に土気の宿場で受取り、21時に野田宿（緑区誉田町1丁目）へ届け、遍田村（緑区辺田町）が運び千葉町へ23時に渡しました。遍田村は籠を持つ人足2・提灯持ち1・犬追い払い1・宰領1の5人で運送しました。（史料・解説p165（437羽の小鳥へ水を飲ませたり、昼夜にわたる宿場継ぎ送りは大変だったと思います）。

その3 雨乞いの祈祷

天保10年は日照りで、農村では雨乞い祈祷をしました。雨乞いを口実に仕事を休み、御神酒で宴会をすることを禁じましたが、正当な祈願は許可されました（p154、（p155の資料は地元では保存の意志が無くて、現在はNPO法人ちば・生浜歴史調査会で預かっています。）

《本会の古文書学習会の労作です》

古文書の史料写真と墨書の漢字・読み下し文を併記していますので、くずし文字の学習に興味のある市民に参考になると思います。

本会の古文書学習会受講生が分担して史料写真の墨書文字の活字化・読み下し文・解説をし、さらに、緑区茂呂町に残っていた御用留を全部読んで、内容目録を95頁にまとめてあります。村々がどのように幕末を暮らしていたかを知る参考としても良いと思います。

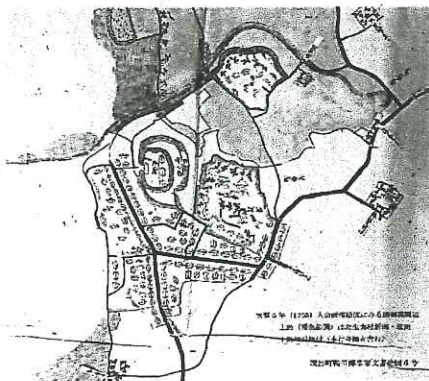
《ご希望の方には頒布いたします》

A4判 360頁 @3300円

連絡先 080-5889-2592・・・伝言でああなたの電話番号をお知らせください。

またはメールで、oi2ha2ma@softbank.ne.jp

生実藩領椎名上郷の御用留



NPO法人ちば・生浜歴史調査会

秋の歴史講座・歴史散歩で御用留の講演と現地見学を計画中!!!

地域の、過去・現在・未来を結ぶ活動を通し、豊かな毎日を過ごしましょう

令和3年度 賛助会員紹介

ご継続・ご入会ありがとうございます。この浄財は主に民具類の修理・保存収納のために使わせていただきます。賛助会員には地域誌を一年分贈呈致します。

*賛助会員登録受付中です。

火木土 9:30~16:00 電話 043-265-8816

携帯電話 080-5387-2592

又は oi2ha2ma@softbank.ne.jp

までご連絡ください。

- (浜野)石橋幹男様・小木曾和夫様・叶親重信様・出口恵一様・永井紀子様・並木昭様・太田圭石様・小菅俊一様・久野栄一郎様・久野敏夫様・宍倉敏子様・中島義則様・内河富美子様・中村秀幸様
(はまの台)飯島正幸様
(塩田)田村真理様(南生実)美山敏夫様(生実)菅崎三千三様・今井吉彦様・大和久観浄様・重俊院様・木村芳子様・生実町町内会様・春成美佐子様・秋元禮子様・増田照子様・田鎖かづ子様
(おゆみ野)鈴木毅様(千葉寺)菅崎量進様(院内)松井清子様(寒川)野老和夫様(村田)宇井正昭様(黒砂)田村敏孝様
(弁天)中村陽子様(都町)高山勝様
(船橋市)藤間尚行様(市川市)小田京子様

☆☆☆

令和3年度 行事予定 です。参加ご希望の方は下記の要領でお申し込みください					
月	種類	日	曜・時刻	講座名	内 容
6	講習	1	火 13:30~	古文書整理会	古文書目録作成と浜野村御用留を読む。参加者募集中です。蔵書資料整理。
	体験	12	土 9:30~	かごを編む	荷ひもを利用してかごを編む。
	講習	26	土 9:30~	色紙に書する	本会会員白井担当、
7	講習	6	火 13:30~	古文書整理会	古文書目録作成と浜野村御用留を読む。参加者募集中です。蔵書資料整理。
	体験	24	土 9:30~	昔遊び	親子で、むかしやっていた遊びを楽しむ。
8	講習	3	火 13:30~	古文書整理会	古文書目録作成と浜野村御用留を読む。参加者募集中です。蔵書資料整理。
9	講習	7	火 13:30~	古文書整理会	古文書目録作成と浜野村御用留を読む。参加者募集中です。蔵書資料整理。
	体験	25	土 9:30~	ちりめん細工	ちりめんできろいろなものを作る
10	講習	5	火 13:30~	古文書整理会	古文書目録作成と浜野村御用留を読む。参加者募集中です。蔵書資料整理。
	講演	2	土 9:30~	歴史講座①	埋蔵文化財調査センター小林嵩先生による「古代の話」です。
	講演	30	土 9:30~	歴史講座②	本会会員今井と春成担当。「江戸時代生浜地域のグルメの話」
11	講習	2	火 13:30~	古文書整理会	古文書目録作成と浜野村御用留を読む。
	講習	13	土 9:30~	布ぞうりづくり	残りの布切れで草履を編む。
	体験	未定	未定	歴史散歩	歴史講座①②に関連する内容で検討中。

申し込み方法

NPO 法人ちば・生浜歴史調査会 まで

・先着 20 名で締切ます。但し申し込みが 3 名未満の時は中止とします。

・電話連絡の場合…火、木、土曜日(9:30~16:00)

043-265-8816 携帯:080-5387-2592 伝言・ショートメール可。

oi2ha2ma@softbank.ne.jp でも可。

★旧生浜町役場庁舎は

平常開館しております。★

☆火・木・土曜日だけの開館

☆9時から16時半

☆マスク・検温・手指消毒のご協力をお願いしています

500年前の浜野

本行寺でのこと

あづまじ

「東路のつと」

室町時代の連歌師(れんがし)柴屋軒宗長(さいおくけんそうちょう)が書いた紀行文「東路のつと」という書物の一節からのお話です。連歌師が本行寺にやって来た。

そもそも連歌とは？ 連歌師とは？

連歌とは短歌の上の句(五、七、五)と下の句(七、七)を別々の人が詠み、その付け合いを楽しむ文芸です。学問の神様である菅原道真すがわらのみちざねは連歌の神といわれ、江戸時代には松尾芭蕉まつおばしやうが連歌を基に俳句(五、七、五)確立しました。

連歌師とは和歌や物語などの古典の教養が必要とされた一流の文化人であり、戦国時代に公家や僧侶とともに地方に文化を伝えるうえで大きな役割を果たしたのでした。また、権力者や有力者の身近にいても自由な存在であり、公家や幕府の武士、大名(守護・戦国)から地方武士、さらには民衆とも親密な結びつきを持ち、多様な人間関係を活かし外交的な役割も果たしていたのです。

連歌会とは、複数人で詠み連作形式に繋げていく。自分の句の下に名前を記して、紙面上は、それが順番に並んでいく。場所や目的にもよるが、大体5名~10名ほどで詠むのが一般的。

連歌師・柴屋軒宗長とは文安5年(1448)に駿河(静岡県)の島田しまがわに生まれ、今川義忠いまがわよしただに仕えた後に上洛し、宗祇そうぎ(当時の連歌の第一人者)に連歌を学びます。柴屋軒とは駿河国丸子(まりこ)にある草庵の名称です。

紀行文「東路のつと」は連歌師・宗長の書いた書物です。

つと(苞)とは藁苞(わらづと)のことであり、

土産物という意味です。「東国の旅の土産」という意味で、このような名を付けたとおもわれるのです。

もともとの旅は、金山(群馬県太田市)城主新田礼部尚純てはずの誘いがある、道中の手筈は勝沼みただんしやうのちゆう(東京都青梅市)城主三田弾正忠平みただんしやうのちゆう氏宗・政足父子によってととのえられ、また、松田加賀守宗繁まつだかのかみむねしげとも事前の打ち合わせがなされた上のものでした。同行は安星あほしと珠易しゆい。

この紀行文は永正6年(1509)7月白河の関(福島県)一見のため、駿河国の丸子宿を旅立ち関東に向かうが、合戦や洪水のため白河行きを断念、ここから引き返し、草津を経て品川についたところで、安房の清澄見物(関白藤原房嗣の子道興の書いた「廻国雑記」の清澄見物の一節が思い浮かんだのでしょうか)を勧められて陸路房総に向ったのですが、浜野で引き返し、その後江戸辺りで滞在の後、十二月に鎌倉に出て禅僧たちとの連歌を行った約半年間のものです。成立は永正6年12月のことと考えられます。

足利第10代將軍義隆よしなの時代、まさに群雄割拠の戦国時代、ここ関東でも武士団の生き残りをかけた戦いが続いておりました。宗長のこの旅に隠された目的は、朝廷の有力者である三条西実隆さんじやうにしきね、武蔵野三田氏、上総武田氏の間を周旋し、御服料所(皇室の直轄地)回復のための交渉を担当する役割を果たしていたと考えられます。



本文(文末の引用文献の文1による)に入ります。ここでは「東路のつと」の生浜地区等に関わる部分を抜粋したものです。

【本文】

けふはことに日ものどかにて、かつしかの浦春
のごとし。原胤隆はらくないたいふたねたかの小弓をゆみの館たちの前、小
浜の村の本行寺旅宿也。

【注釈など】

今日はことに日ざしものどかで市川の真間川は春の
ようだ。原胤隆の小弓城の前、浜野の本行寺が旅宿で
す。(文4)

※原宮内大輔胤隆—中世千葉氏の重臣でこの時は下
総で最も有力な人物でしたが、永正14年1517
年足利義明入城の頃、武田氏により小弓城を追われ
ました。(文2)

※その時の小弓城の所在地が現在の生実町、あるいは
南生実町であるのかは確証に至っていないため、こ
こでは小弓城としました。

※本行寺とは顕本法華宗如意山本行寺のことで、この
時の住職は二祖の日行にちぎょうでした。(文8)

当時の本行寺の場所は、浜村の東部、通称「谷」やに
あった廃寺を興し、布教のための道場とし
た。(文3)

【本文】

十四・五日は、千葉の崇神すじん妙見みょうけんの祭礼とて、三百
疋のはや馬の見物也。十六日は延年さるがくの猿楽夜に
入てことはてぬ。

【注釈など】

11月14、15日は千葉妙見宮(千葉神社)の祭礼に出
かけ、三百頭の早馬が疾走する勇壮な様子
を見物し、翌16日は延年の猿楽があり夜になって祭礼
行事がすべて終了しました。(文8)

※延年舞とは、寺院にて法会の後、貴人の接待時などに僧
侶や稚児らによって演じられた芸能。(文4)(文8)

※千葉妙見宮は、千葉氏の氏神ともいべき軍神でし
たが、千葉氏が本佐倉城に移り、千葉に近い生実を本拠と
する原氏が勢力を伸ばしたため、戦国時代には原氏の
支配下にありました。この時の妙見座主は胤隆たねたかの子の
範覚はんかくでした。(文8)

【本文】

十七日連歌有

あづさ弓いそべに幾代霜の松
あづさ弓いそべの小松たが代にか
万代かけて種をまきけん。
此本歌に小弓と云名をくはへて祝
し侍るばかり也

【注釈など】

17日には原胤隆氏の館で連歌会が行われ
ました
霜の降りた松は、この小弓の磯辺に幾千代の
歳月を経たことだろう
磯辺の若松は、だれの代に万歳の祈りをかけ
て種をまいたのだろう。
「あづさ弓いそへの小松たれよにか万代かけ
て種をまきけん」は、『古今和歌集』の「梓弓
磯辺の小松たが代にか万代かけて種をまき
けん」(読み人知らず)という歌をふまえ、館
のある「小弓」という地名を梓弓によせて、
ご当地への祝意をこめたものです。(文
4)(文8)

【本文】

此館は南は安房・上総の山たちめぐり、西北は海はるばる
と入て、鎌倉山よこたはり、富士の白雪半天に指おほひて
見ゆ。駿河国にてみるよりはなをほどちかげ也。遠くても
るはちかき山成べし。

【注釈など】

小弓の館は、南は安房上総の山々が立ちはだかるように見渡
せ、西や北に江戸湾が広く入り込み、鎌倉の山地が見渡せまし
た。富士山の雪が天の半ばまで覆っているようにみえる。不思
議なことに静岡県駿河で見るよりは、なお距離が近そうであ
る。遠く離れて見るべきものは、かえって近くにある山なのだ
ろう。(文4)(文6)
※胤隆の法名は不二庵全覚で、この館からの富士山の眺めにち
なんているのかもしれない。(文8)
※「遠くてもみるは・・・」では、何故か室生犀星の「ふるさと
遠きにおいて思ふもの・・・」が浮かんできました。(筆者談)

【本文】

十九日に又連歌有。発句胤隆
さえし夜の嵐やふくむけさの雲
心あたらしく風情至極せり。
庭にかつちれ雪のはつ花
発句に景気ことつきぬれば、
ただ今朝の様ばかり也

【注釈】

十九日にまた連歌会がありました。
た。発句は胤隆
冷えさえた昨夜の嵐を含み残す
のか、今朝の雲の動きが急である
よ
新鮮な詠みぶりで、情趣がすば
らしい句であった。
なおまた、雪よ、庭に散りしけ。
冬の初花として発句で叙景が尽
くされたので、自分は今朝の情景
を詠んだだけである（宗長の脇
句）（文8）

【本文】

けふは一座もするするとして日のう
ちに終ぬ。夜に入て延年の若衆こゑよ
きかぎり廿余人、吹、はやし、ととの
ひ、舞、うたひ優におもしろく、さか
づき数そひ、ももたび心ちも狂するば
かりにて、暁ちかくなりぬ。のこりお
ほかりし事成るべし。

【注釈など】

その日は胤隆、宗長を中心とした一座は句に難
洪する者もなく、スムーズに進行し日中に会が
終わりました。夜になると延年を舞った若衆か
ら選ばれた美声の者二十人あまりが、笛を吹き
囃し、太鼓や鼓を打って拍子を取り、舞って謡
いました。その様子は優雅で趣があり、見物し
ていた宗長たちの杯も進み、何度も狂するばか
りの境地を楽しむうちに、明け方まで過ごし名
残を惜しんだのでした。（文8）

※この若衆は妙見宮の祭礼で延年の猿楽を行
った者たちでしたが、宗長を歓迎するため、
胤隆が呼び寄せたのでしよう。（文8）

※浜野村海浜、宗長滞在中（13日〜20日）の
月は十五夜前後なので、潮の干満の大きい頃
です。（文4）

【本文】

又、浜の村本行寺にして、
声遠し月やしほひのはま
胤隆此第三、終日心ゆき
し一座也。

【注釈】

再び、宗長は浜野の本
行寺に戻りましたが、
そこでも連歌会が催さ
れ月明かりの潮の干い
た浜で、遠くに鳴く干
鳥の声が聞こえるよ
と発句を詠みました。
脇句は本行寺の住職
（日行）が付けたよう
ですが記されていま
せん。胤隆は第三番目の
句を詠み、その日は1
日中心ゆくまで楽し
だ一座でした。

【本文】

小弓にて盃たびたび、ざれごとなどいひし、はたちばかり成、其行するにや、あす立ちなむとする夜更て来りて、月まちいづるほどもなく立帰りし名残、ねられぬ老のすさびに、

おもひやれ磯のね覚のもしほ草しきすてうし老のしら浪
ともなひきたりし人のかたへ朝に申つかはし待也。

【注釈】

前の晩の酒宴で戯れ言を言った二十歳ばかりの若衆が旅の行先の関係からか明日出立しようとする日の夜が更けてから尋ねてきたものの、日の出る前に帰ってしまったので、老いのすさびとして眠れぬままに名残を惜しみ、(文4)(文8)
製塩のために掻き集めて、敷き捨てられた藻塩草のように、眠れぬ夜に浜辺で白波の音を聞いている、老いた私のことを思いやってください。という短歌を詠み、翌朝若衆を伴ってきた人に遣わしました。(文8)

こうして、原胤隆の款待を受けて過ごした宗長でしたが、何故か目的だった清澄見物をせずに帰途につくことになりました。

【本文】

はまのむらをたちて、けみ川と云所に、浦風あまりはげしかりしかば一宿して、いまだ日も高かりしに、人びと物語のつゝるでに一折などの事にて、玉かしは藻にうづもれぬあられかな可睡軒かすいけんここまで打送て、旅宿のなぐさめとりどりにして、翌日、市川と云わたりのおりふし雪風吹きてしばしやすらふあいだに、むかひの里にいひあはする人有て、馬どものりもて来て、やがて舟わたりして、あしのかれはの雪を打はらひ、善養寺と云に落つきぬ。

【注釈など】

浜野村を出発して江戸湾に沿って西に向かいましたが、浦風があまりにも激しかったので、検見川(千葉市花見川河口の地)という所で一泊することになりました。まだ日も高かったので、一行は物語のついでに連歌を詠み、宗長も水底の美しい岩が、藻に埋もれずあられとなつてほとばしっているよという句を詠んでいます。(文4)(文8)

可睡軒がここまで見送つて来て、旅宿での慰めことをいろいろしてくれて、翌日、市川に着きました。渡に着く折から、雪風が吹いてしばらく休息する間に、対岸の里と連絡しあう人がいて、馬などに乗って来て、そのまま舟で渡って、葦の枯れ葉に積もる雪を打ち払いながら、善養寺という所に到着しました。(文4)

※可睡軒とは小弓あるいは千葉あたりの連歌師でしょうか(文8)

参考文献及び引用文献

- (文1)・宗長作品集〈日記・紀行〉 古典文庫四四三冊 重松裕巳 古典文庫 1983年
- (文2)・千葉市南部の歴史 岡倉健吉 千葉市教育委員会 1986年
- (文3)・郷土のあゆみ 生浜郷土史研究会 三晃社 1989年
- (文4)・中世日記紀行集 新編日本古典文学全集 48 東路のつと 伊藤敬 小学館 1994年
- (文5)・千葉県の歴史 石井進 宇野俊一 山川出版社 2000年
- (文6)・中世日記紀行文学全評釈集成第7巻 東路のつと 伊藤伸江 勉誠出版 2004年
- (文7)・千葉市の戦国時代城館跡 千葉市立郷土博物館 2009年
- (文8)・戦国の房総を訪れた連歌師宗長「東路のつと」を読む—城西国際大学日本研究センター紀要第6号 外山信司 2011年1月講演録
- (文9)・シリーズ藩物語 生実藩 西村慎太郎 現代書館 2017年

あとがき

今から約500年前(1509年の室町時代)にタイムスリップ

3月上旬のある日、NPOの会員の女性の方から1枚の用紙をもらいました。それは、花見川区の友人から、同区にある検見川小学校の「学校だより」の中の「検見川の歴史」の中に、「浜野の事が書いてあったので差し上げます」と渡されたものとのこと。

そこには、室町時代の連歌師(れんがし)柴屋軒宗長(さいおくけんそうちょう)が書いた「東路のつと」という今から約500年前の紀行文の一節が書かれておりました。

「はまのむらをたちて・・・けみ川という所に・・・」というものでした。

—NPO会員 清六・記—

柴屋寺と宗長

〒421-0103 静岡市駿河区丸子 3316 電話 054-259-3686

宗長の父は刀鍛冶師であり、駿河今川の六代目義忠の刀を作っていた。三男の宗長が聡明で利発な子であったので義忠は京の一休宗純のもとに弟子入りをさせた。宗長はその才覚を現していく。応仁の乱の後、今川氏真(うじちか)八代目は丸子に文化を広めるために宗長を呼び寄せ、その施設として寺が建立された。庭は宗長の歌会用に造園されたものだろう。また、宗長の木像も寺蔵されているとの事で肖像画と共に伺えば拝見できるそうです。・・・柴屋寺へお電話してお聞きしました・・・